創立130年を機に

深まるラオスとの交流

飯沼准教授と学生らが訪問

ブアソーン首相と歓談

経済学部国際経済学科の「海外特別研修」（ラオスコース、9月8～17日）でラオスを研修訪問中の学生と指導の飯沼健子准教授ら14人が、今年5月、本学から名誉博士称号が贈られたブアソーン・ブッパーヴァン首相と対面。学生たちはうれしい再会を果たした。同首相は専大訪問時の思い出を熱く語り、学生たちを歓待した。

▲　ブアソーン首相（右）に質問する学生たち

同首相との対面は、同研修の現地コーディネーターの力添えで、ラオスへ出発直前に決定した。一行は9月11日、首都ビエンチャンの首相府を訪ね、ブアソーン首相と約1時間にわたって歓談した。

同首相は、ラオスの歴史やラオスが置かれている国際的状況について説明し、ラオスと日本の友好的関係や日本の援助についていくことを祈念するなどと語った。

学生たちは、急きょ学んだラオス語で自己紹介し、首相の学生時代のことや日本の印象などを質問した。

首相はユーモアをまじえてそれに答え、特に名誉博士称号が贈られた5月の専修大学訪問が感銘深く、大切な思い出になったと詳細に語った。

専大に到着すると、学生たちはラオスの旗を振って歓迎してくれ、スピーチでは椅子がなくなるほど多くの学生が出席し、聴いてくれた。また、ラオスを訪れた学生の活動の様子が展示され興味深かった。式典後に学生たちから祝福を受け、ラオスで撮影された学生たちの写真のアルバムは大切に飾ってある――など、本学や学生との思い出を懐かしそうに披露した。

▶ ブアソーン首相（前列右から4人目）、飯沼准教授（同5人目）を囲んで…

さらに、本学から日高義博理事長・学長の書簡と贈答品が渡され、専修大学の最新情報が報告された。

▽本学創立130年の9月16日、研修中の一行は、ラオス南部サワンナケートで祝福する▽10月末の創立記念行事には、国際交流協定校のラオス国立大学の学長が出席する▽本学の社会知性開発研究センターの「持続的発展に向けての社会関係資本の多様な構築：東アジアのコミュニティ、セキュリティ、市民文化の観点から」プロジェクトが始まり、ラオスも研究協力対象国になる▽新首相になる鳩山由紀夫氏は、かつて本学の教員だった――。

専大生と首相との面会の模様は、現地新聞5紙に掲載され、国営テレビでも放映された。

学生代表としてあいさつした山口翔子さん（3年次）は「ブアソーン首相は気さくな方で、いつの間にかリラックスできた。首相に約束した通り、今回の訪問で、目で見て耳で聞いて学んだことすべてを日本へ伝えたい」。同じく徳満翔平さん（2年次）は「学生の私たちに、まっすぐ目を向けて話をしていただいた。人間的に素晴らしい方です」と、ともに同首相の魅力を話した。

▲　専大生訪問を報じるラオスの新聞2紙

全日本高校・大学生書道展で優秀賞

学生書道のグランプリとされる「第14回全日本高校・大学生書道展」で、本学の井坪大喜さん（経済4）と木村江梨子さん（経済3）が優秀賞に輝いた。

木村さんは昨年に続いて2回目。入賞作品は8月末、大阪市立美術館で展示された。書の楽しさ、魅力を2人に聞いた。

井坪さん

木村さん

常に気合いを入れて

井坪　大喜さん（経済4）

「書の先生は、書道研究会顧問の仲川恭司先生、そして研究会の仲間たちです」と語る井坪さんは、入学後友人に勧められて入った書道研究会で、本格的に書のけいこを始めた。

「ゼロからのスタートでした。上級生や、書に関しては〝先輩〟にあたる同級生や下級生に何でも聞きました」と言う。そして「書けば書くほど成果が作品に表れる」書の魅力に瞬く間に取りつかれた。

入選作は書聖・王羲之の作品を臨書した光明皇后の「楽毅論」。「これを勉強すれば、王羲之の筆使いが学べるのではと、1年間取り組み、わずかずつですが、つかめてきました」。

出品直前は、連日徹夜となった。顧問の仲川文学部教授が選んだ作品を応募。それが大規模な書道展では初めての〝うれしい〟優秀賞に輝いた＝右の作品。

まっさらな気持ちで

木村　江梨子さん（経済3）

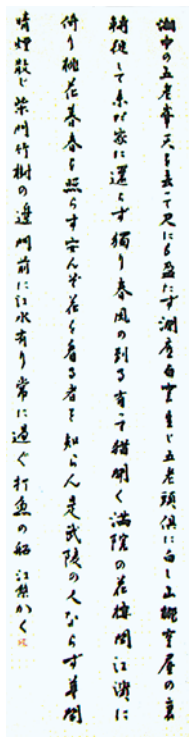
昨年に続く優秀賞を手に入れた木村さんは、小学校3年からけいこを始め、同じく書道研究会のメンバーとして活躍する。

「書いている時は、あまり頭で考えすぎず、無心で取り組んでいます。入選作は、リラックスしてまっさらな気持ちで書きました。2年連続で賞をいただけるとは思っていなかったので、とてもうれしい」と喜びを語る。明詩5首の書き下し文を調和体（漢字仮名交じり文）にした入選作は、帯のように流れる筆致だ＝左の作品。

「練習の継続が大切だと実感しています。今後はこれまで取り組んでこなかった草書体にもチャレンジしたいと思っています」

「仲川先生からは、書の線にもっと深みを出すようにとアドバイスされました。いつも気合いを入れながら取り組んでいます」

鳳祭に出展した後は、来春展覧会が予定される「独立書展」への応募を目指す。



※書道研究会は鳳祭の期間中、生田キャンパス9号館1階で会員の作品を展示する。

課題解決型インターンシップ

プレゼンに向け活動中

キャリアデザインセンターの課題解決型インターンシップに取り組んでいる学生たちが、プレゼンテーションに向けての情報収集やプロモーションのために活動している。9月20日に多摩市民館で行われた「たまたま子育てまつり」で、実際に子どもたちに窓ガラスや床に絵を描いてもらい、感想を聞いた＝写真㊤。

（活動報告は同センターホームページにも掲載）。

「経営学部」
池本正純ゼミ

日本理化学工業の固形マーカー「キットパス」を使い「子供にやさしい街づくり」を提案する。

「商　学　部」
神原理ゼミ・
石川和男ゼミ

アソシエCHACOの課題「ユニバーサルファッションの普及戦略」に向け、9月11日、川崎市立多摩病院の敬老イベントに合同で参加。視野が狭くなったり、腕を固定したりするなどの用具を手作りして、身体の不自由さを体験してもらい、同時にユニバーサルファッションの認知度調査を行った＝写真㊦。

36人参加 12週間日本語学ぶ

「秋期日本語・日本事情プログラムおよび日本理解プログラム（BCLプログラム）」が9月25日からスタートした。

参加者は13カ国・地域の15大学から来日。米ネブラスカ、オレゴン両大学、スペインのバルセロナ大学など国際交流協定校の学生を対象にしたBCLプログラム（日本ビジネスと日本文化を学ぶ）参加者22人と特別聴講生、一般対象14人のあわせて36人が日本語・日本事情プログラムを受講。12月19日までの12週間、日本語学習に励むほか大手企業見学や箱根研修、小学校訪問、茶道、書道、ホームビジットなども体験する。

▲　ウエルカム・パーティーで

メキシコのイベロアメリカーナ大学から参加、コミュニケーション学を学ぶエステバン・アベラールさんは、ウエルカム・パーティーで「メキシコでは三菱、パナソニック、日立など大きな日本企業が進出しているので日本を身近に感じました。日本の生活を楽しみにしてきました。専大生は本当に親切で優しい」と笑顔で話した。

S・リム教授迎えて講演会

生田キャンパスで

第141回国際交流特別講演会「やさしい英語による経済学講座」5回シリーズが、講師にスティーブン・リム経済学部客員教授（ニュージーランドのワイカト大学経済学科教授）を迎え開かれる。入場無料で随時参加可能。▽日時＝11月7日から12月5日までの毎週土曜日。10時～11時30分▽場所＝生田キャンパス973号教室（最終日のみ812号教室）

※詳細は国際交流事務課へ。